

絵本で子どもも大人も心を豊かに

～絵本専門士養成制度準備委員会報告書～

平成 26 年 2 月 12 日

絵本専門士養成制度準備委員会

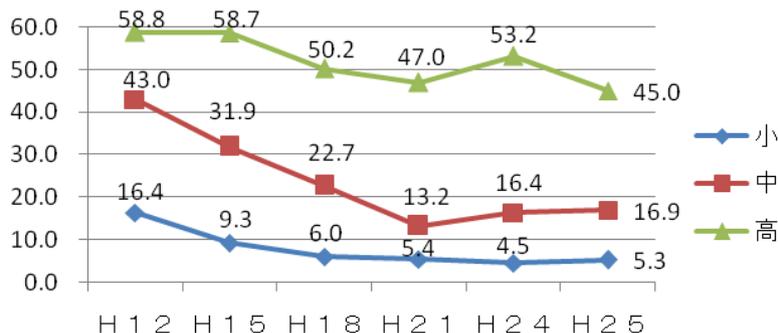
子どもの読書活動の推進

1. 絵本の読み聞かせをはじめ、子どもの読書活動の大切さを認識し、国を挙げて読書に関する活動を推進するため、平成 11 年 4 月に「子どもの未来を考える議員連盟」（「国際子ども図書館設立推進議員連盟」の改組）が結成され、平成 12 年を「子ども読書年」とする決議がなされた。

さらに、平成 13 年 4 月には、「子どもゆめ基金」（100 億円）が創設され、民間団体の行う子どもの読書活動等に対し、現在の国立青少年教育振興機構（当時、国立オリンピック記念青少年総合センター）によって助成業務が行われることとなった。現在、子どもゆめ基金では、子どもの読書活動に関し、年間約 500 件、総額約 2 億円の助成が毎年度行われている。

また、「子どもの未来を考える議員連盟」や民間の読書関連団体（出版業界・図書館・作家・画家など）で構成された「子どもの読書推進会議」などの尽力で、平成 13 年 12 月に議員立法により「子どもの読書活動の推進に関する法律」が制定され、この法律に基づき、政府において「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」（平成 14 年 8 月 2 日閣議決定）が策定され、子どもたちの読書活動を推進するための様々な施策が展開されている。そして、平成 25 年 5 月には、第三次計画が閣議決定され、その目標として今後 10 年間で 1 ヶ月に 1 冊も本を読まない子どもの割合（以下「不読率」という）を半減することが掲げられている。

1 カ月に 1 冊も本を読まない子どもの割合の推移（％）



第三次基本計画		
《現状(H24)》	【指標】(H29)	《参考(H34)》
小学生 4.5%	→ 3%以下	→ 2%以下
中学生 16.4%	→ 12%以下	→ 8%以下
高校生 53.2%	→ 40%以下	→ 26%以下

今後10年間で不読率の「半減」を目指す

出典：第三次「子ども読書活動推進基本計画」の概要①

海外での読書推進に関する取組み

2. 諸外国においても、子どもの読書や読み聞かせ活動が奨励されており、例えば、米国では、ジョージ・H・W・ブッシュ大統領が1991年に発表した「2000年のアメリカ教育戦略(America 2000:An Education Strategy)」の6つの教育目標の一つとして、「米国のすべての子どもは学習の用意ができた状態で就学を開始すること」が設定され、その具体的な内容として、親による読み聞かせの充実が取り上げられている。

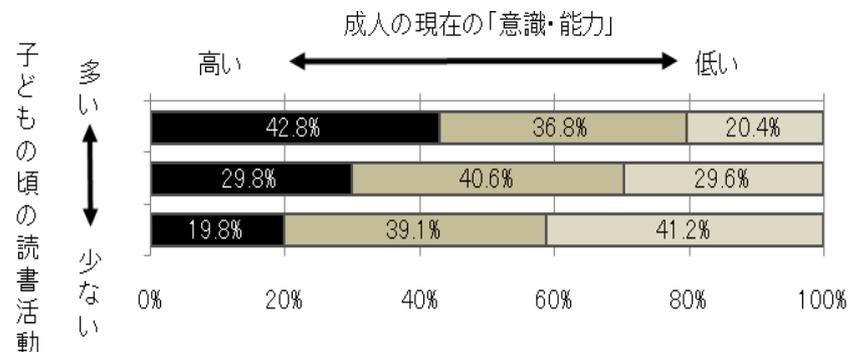
さらに、1993年次期大統領に就任したクリントンが上記の教育目標を引継ぎ、2期目最初の一般教書演説(クリントンコール)において、「親が産まれたばかりの子どもに話しかけたり、歌ったり、あるいは本を読んであげることがどれほど大切か、科学者によって次第に解明されつつある」と、読み聞かせの重要性について言及している。

また、英国では読書離れによって国内の児童、生徒の読み書きの力が低下していることを危惧し、1999年に第1回「国民読書年」を実施し、ブックスタート事業を開始した。2008年の第2回の「国民読書年」では、家庭での読書を推進することで人々の読書に対する意識を変えて、英国を「読む人の国」とすることを掲げるなど、国の重要施策として多くの団体と連携し取組を継続している。

子どもの頃の読書活動の効果に関する調査結果

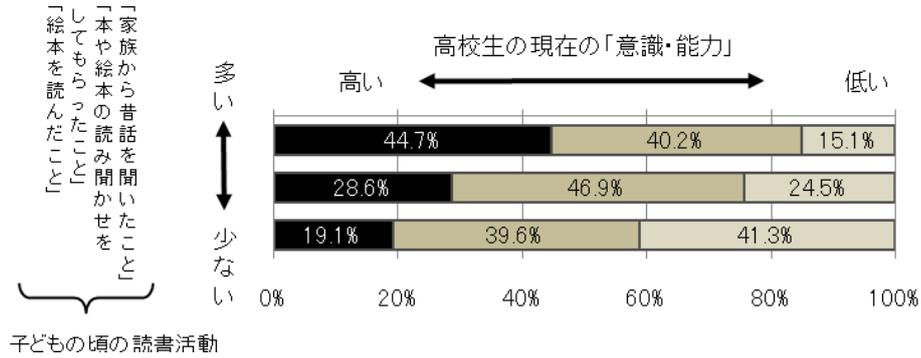
3. 国立青少年教育振興機構においては、平成24年3月に、子どもの頃の読書活動が人々の意識・能力(「未来志向」「社会性」「自己肯定」「文化的作法・教養」「論理的思考」等)に及ぼす影響や効果などについて調査を行った。その結果、子どもの頃の読書活動が多い成人ほど、未来志向や社会性などの現在の意識・能力が高いことが判明した。さらに中学生、高校生を対象とした調査においては、読書活動の中でも特に幼児期や小学校低学年に「家族から昔話を聞いたこと」「本や絵本の読み聞かせをしてもらったこと」「絵本を読んだこと」が多かった中学生や高校生ほど、意識・能力が高いことが明らかとなっている。

図1 子どもの頃の読書活動と現在の「意識・能力」との関係(成人)



出典：「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究報告書」(平成25年2月)

図2 子どもの頃の読書活動と現在の「意識・能力」との関係（高校生）



出典：「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究報告書」（平成25年2月）

第三次子どもの読書活動推進基本計画のポイント

4. 現在の「第三次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」においては、「子どもの読書活動は、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものとし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものであり、社会全体で積極的にそのための環境の整備を推進することは極めて重要である」ことを強調するとともに、子どもの自主的な読書を推進するための方策として次の3点を掲げている。

- 家庭、地域、学校を通じて社会全体で役割と連携を強化し取組みを推進するとともに必要な整備体制に努める。
- 子どもの読書活動の推進に資するため、家庭、地域、学校において子どもが読書に親しむ機会の提供に努め、施設、設備その他の諸条件の整備・充実に努める。
- 子どもが自主的な読書習慣を身に付けていくためには、特に、保護者、教員、保育士等子どもにとって身近な大人が読書に対する理解と関心を持つことが重要である。このために社会全体で読書活動を推進する機運を一層高める必要がある。

さらに、読書に関する環境整備と人材育成に関する具体的施策として、以下の4点に取り組むこととしている。

- 家庭における保護者の積極的な取り組みとその支援
- 地域においては図書館での司書、司書補の専門性の向上、ボランティア活動の促進と研修の充実
- 学校においては学校図書館の活用と司書教諭を含めた全教職員の連携と指導力の向上とともに、地域のボランティアや多様な経験を有する地域の人材協力による読書活動の支援
- 幼稚園、保育所においては安心して図書に触れられるスペースの確保と保護者、ボランティア等の連携、協力による図書整備の促進

「絵本専門士」養成制度の創設

5. 前述のとおり、今日、子どもの読書活動を充実させることが重要であり、その実現にあたっては、読書に関する専門的知識や実践力をもった指導者を養成し、その活用により、学校、家庭、地域を通じた子どもたちの様々な読書活動を支援することが大切である。

特に絵本は、子どもの言語力、感性、文脈理解力、物事の理解力を驚くほど発達させ、豊かな人格形成をもたらすものとして、また、大人にとっても新たな世界を発見、体感できるものとして、極めて重要である。

そこで、平成 24 年 10 月に有識者による絵本に係る専門家の養成に関する検討会（絵本専門士養成制度準備委員会）を立ち上げ、絵本に係る専門家（以下「絵本専門士」という）の養成について検討を行った。

6. 今般、5 回の本委員会による検討を重ねた結果、子どもたちの健やかな成長を促す絵本の可能性やその活用法を、学校や家庭のみならず地域社会全般に普及させるとともに、実際に絵本の読み聞かせをはじめ子どもたちの読書活動の推進に携わる専門家として「絵本専門士」制度の創設及び養成カリキュラムを提言したい。

この「絵本専門士」には、社会において広く絵本についての理解を広め、その普及を図る観点から、まず絵本というメディアの特性について十分な知識をもち、成長期の子どもたちに限らず、人の心と身体の発達にもたらす絵本の効果や意義を理解していることが求められる。さらには、国の内外で出版され、多くの人々に読み継がれてきた優れた絵本作品についての知識や、絵本をはじめとする子どもの本の出版事情など、絵本に関わるさまざまな知識も必要である。

その一方で、絵本の魅力を理解し、他の人びとにその可能性を伝えていくためには、豊かな人間性と確かなコミュニケーション能力を伴っていなければならない。子どもたちの多様な生活環境や人びとの異なった価値観を受け入れ、その人にあった絵本の読み方と楽しみ方を見つけ出すための支援ができる「絵本専門士」には、優れた感性の持ち主であることも求められる。

加えて、他の人びとと交わり、絵本の良さを伝えていくためには、読み聞かせやお話し会などで確かな企画力と表現力が発揮できなければならない、そのための技能も不可欠である。

こうした観点からは、絵本に関わる多様な領域の専門家・実践家から成る講師陣により、少人数の受講者を対象にした密度の濃い講座を開講することで「絵本専門士」の養成を図ることが適切と考えられる。

このように養成された「絵本専門士」には、広く子どもやその保護者等に対し、絵本を用いた各種の事業を企画・実施し、それを指導する役割を担うとともに、図書館、公民館、学校、放課後子ども教室、高齢者福祉施設、書店などの様々な場面で、活躍することが期待される。

7. 以上を踏まえ、「絵本専門士」の養成のためのカリキュラムを、「知識」「感性」「技能」の 3 分野で編成し、それぞれの分野は、次のような内容で構成するものとする。

○「知識」分野

絵本に関すること（歴史や表現特性や教育等）及び子どもの理解（児童福祉・心理）に関する 11 科目（18.5 時間）

○「感性」分野

絵本をとおして豊かな人間性、魅力ある人間性を育むための 8 科目（13.5 時間）

○「技能」分野

手遊び、読み語り、創作活動等おはなし会やワークショップを運営する技能の 8 科目（14 時間）

上記のほか、養成講座の最初に、まず絵本の活用の意義等に関するオリエンテーションを行い、また養成講座修了時には、今後どのような場で活躍していくのかを相互に語り合うディスカッションの場を設け、養成講座全体では下記のとおり計 30 科目(50.5 時間)とする。

[絵本専門士養成講座カリキュラム]

オリエンテーション	オリエンテーション 【1 科目 1.5 時間】	感性 (8 科目) <13.5 時間>	絵本の持つ力 【1 科目 2 時間】
知識 (11 科目) <18.5 時間>	絵本総論 【5 科目 9 時間】		心に寄り添う絵本 【1 科目 1.5 時間】
	知っておきたい絵本 【3 科目 4.5 時間】		絵本と空間 【1 科目 1.5 時間】
	絵本と出会う 【3 科目 5 時間】		子どもの感性に学ぶ 【1 科目 1.5 時間】
技能 (8 科目) <14 時間>	絵本の世界を広げる技術 【3 科目 5 時間】		絵本と大人の感性 【1 科目 2 時間】
	絵本を紹介する技術 【3 科目 5 時間】		ホスピタリティに学ぶ 【1 科目 1.5 時間】
	おはなし会の技術 【2 科目 4 時間】	絵本が生まれる現場 【2 科目 3.5 時間】	
ディスカッション	こんな絵本専門士になりたい！ 【2 科目 3 時間】	全体：30 科目 50.5 時間	

(参考)

絵本専門士養成制度準備委員会名簿

委員長	肥田美代子	公益財団法人文字・活字文化推進機構理事長
委員	磯部 延之	全国学校図書館協議会参事、全日本小学校学校図書館研究会会長
委員	糸賀 雅児	慶應義塾大学文学部教授、 公益社団法人日本図書館協会認定司書事業委員長
委員	加藤 純子	作家、一般社団法人日本児童文学者協会副理事長
委員	高橋 小織	絵本・日本プロジェクト会長
委員	竹下 晴信	日本児童図書出版協会会長
委員	田中壮一郎	国立青少年教育振興機構理事長
委員	中川 素子	文教大学名誉教授
委員	柳田 邦男	作家、評論家
委員	山本 省三	絵本作家、一般社団法人日本児童文芸家協会常務理事 (委員は氏名の 50 音順に掲載)